

語の意味とは結局はその語がいかに使用されるかということであるならば、テキストの解釈自体が新たな「テキスト」とされねばならない。

「J資料」をテキストとして成立した教父の解釈が「新たなテキスト」と成ったとき、「蛇とサタン」の結びつきの内的意味連関は改めてそこで問われてこよう。

中世に入ると「注解 (expositio)」はノイロンがシナプスを伸ばしていく様に一切の文脈的制約を超えて聖書の語句をつなげていく。その意図は何であったのか。例えばエックハルトにとっては、聖書解釈は聴く者の内にゆらぎを与える為の手立てであった。「エッ」と自らの内に落差が露わになってくるようなささやかな覚醒のためのゆらぎを与えることであった。

---

## 意見

中川 純男

篠崎氏は、「テキストの読み」と「テキストの解釈」とを区別しつつ、ギリシア教父による聖書解釈の問題性を鋭く指摘された。教父の聖書解釈が現代の聖書学に支えられた今日的な「テキストの読み」にただちに貢献するものでないことは、ギリシア教父の研究者といえども認めるざるをえないであろう。しかし、水垣氏の提題は、ギリシア教父の聖書解釈が、篠崎氏の区分による意味での「テキストの解釈」ではないことを明らかにしたと思われる。水垣氏は、ギリシア教父にとって聖書解釈とは、聖書のことばを「現在のなものとして受け取る」読み方であり理解の仕方であると指摘された。このことはギリシア教父の聖書解釈が、あらかじめ用意された概念の枠組みの中で、あるいは聖書に含まれていない概念を鍵としてテキストを読みかえるといった意味での「解釈」とは別の「枠組み」の中で動いていたことを告げている。問題は二つある。一つは「テキスト」としての聖書とは何かという問題である。われわれに与えられた聖書は、たんなるヤハウィスト文書ではない。聖書に文書の全体性を認めるなら、その「著者の意図」はヤハウィストの意図と同一ではないであろう。もう一つは「テキストの読み」の現在性はどのようにして実現するのかという問題である。お二人の提題が一致して指し示しているように、聖書の読みは、読み手である人間とその世界の中でしか現在性を獲得することができない。しかしこのことはたんに読み

手とその世界が聖書解釈に読みの「現在的な」枠組みを提供するというのではないであろう。そうであれば聖書は時代時代に異なった読み方をされる書物であるに過ぎないことになる。

---

## 意見

## 霊的解釈の射程

岡部 由紀子

当日の私の質問は、提題者のお二人が使われた「霊的解釈」という表現をめぐるものであった。「霊的な」という形容詞はテキスト教の伝統の中で多様な用例と用法を持つと思われるが、聖書解釈（ないし解釈論）においてどのように機能しているのか。——このように問うのは、一方で、それが「あるべき」解釈を論じる際の「評価語」として、また聖書解釈が一般の文献解釈と異なるそのゆえんに応じるものとして位置づけられていると考えられ、他方で、特定の手法や特定の人たちによる特徴的な解釈のあり方を指すと考えられるからである。このような状況それ自体は歴史的事実に関する問題であろう。それとは別に、解釈という高度に総合的な言語活動において価値という地平がどのように関与しているのかという問題があると考えたい（ご提題に挙げられていた、解釈の「意義」とか「正当性」という言い方も同じ問題の地平を示唆するものと受け止めている）。「霊的」というタームが開く問題の射程はどこまで届くのか、それが当面の問題である。

解釈において、本来は表現法を言うにすぎない「アレゴリカルな／比喩的な（解釈）」と、価値的な地平を反映する、身分の違う用語であるはずの「霊的な（解釈）」は、特定の状況の下で（例えば旧約の字義通りの解釈に対抗して、「アレゴリカルに」解することが「霊的」とであると主張されるとき）しばしば同じことのように語られる。その背景には、*IICor.3:6*「文字は殺し、霊は生かす」の「文字」と「霊」の対比が、あるときは「文字どおりの表現」と「（広義の）比喩的表現」の対比として、またあるときには「躰かせる解釈」と「あるべき／正当な解釈」の対比として言われてきた伝統があろう。こうした状況があったことをふまえてか、アウグスティヌスはその聖書解釈論 *De doctrina christiana* で「霊的解釈 *intellegentia spiritalis*」とは「あるべき解釈」のことであり、これを妨げるのは、「比喩的」に解すべきところを